

# 推薦入試の中学生に及ぼすインパクト

## — 導入の理念と意図せざる帰結 —

比較教育社会学コース 中 澤 渉

The Impact of High School Admission by School Recommendation  
on Junior High School Students

— The purpose of adoption and the unintended consequence —

Wataru NAKAZAWA

### Summary

The high school admission by school recommendation is extended into all prefectures in Japan except Osaka and Gumma now. But there is no research on the impact of the recommendation system on junior high school students. This paper focuses on the impact by making a survey of their action at Saitama Prefecture.

The recommendation system aims at evaluating the students by “Kosei (individuality)”. Because Japanese selection system has been criticized by making too much of scholarship and making light of other good points. “Kosei” means “outstanding” or “prominent” in this context. According to this survey, the more excellent academic records he (she) has, the more outstanding he (she) is considered. The recommendation system is advantageous to the students who have excellent academic records after all. And the recommendation system increases the points of evaluation. A student who wants to go to the college-minded high school has a lot of hurdles to survive the competition. On the other hand, a student who doesn't want to go to the college-minded high school can avoid serious competition. Thus, the gap in scholarship between the two kinds of students will extend in the long run.

### 目 次

- I 問題の所在
- II 推薦入試拡大への道程
  - A 埼玉県に置かれた状況
  - B 埼玉県の推薦入試の概要
- III 質問紙調査のデータ分析
  - A 質問紙調査の概要
  - B 推薦入試を希望する生徒とは
  - C 推薦入試を希望する理由
- IV まとめと今後の課題

### I 問題の所在

第14期中央教育審議会の答申や高校教育改革推進会議の報告などにおいて、高校入試選抜方法の多様化、選抜尺度の多元化が提言された。これらの提言を受けた一連の改革により、推薦入試、学力検査の傾斜配点、調査書重視の評価、面接や作文、実技検査といった、さまざまな新しい試みが全国的に実施されてきた。

このうち推薦入試は「学力試験では評価できない、生徒の多様な個性や能力・適性、意欲、努力の成果や活動経験などについての優れた面を評価することが可能で」<sup>1)</sup>あるとされ、特に1990年代に入って急速に広まった。制度上推薦入試が存在しないのは群馬県と大阪府のみ<sup>2)</sup>となっており、学力検査を実施するいわゆる「一般入試」と並ぶ制度として位置付けられるようになり、中学校へ多大な影響を齎していると考えられる。2000年度の公立

表1 推薦入試実施状況(2000年度公立高校入試)

	普通科	農業科	工業科	商業科	全学科
実施県数	44	44	44	44	15
全校で実施している県	15	44	42	40	—

数字はすべて全日制

高校入試での推薦入試実施状況は表1の通りとなっており、全国で見た場合1999年に公立高校で入学した生徒の約2割が推薦入試を経由している<sup>3)</sup>。

そもそも推薦入試は、これまでの選抜方法が学力という一面的な能力の評価に偏っており、その学力選抜が多様化や個性化という近年の教育改革の流れに反するものであるという現状認識のもとで拡大されてきたものである。つまり推薦入試の導入には、子どもには皆、学力に限らない様々な能力や適性が備わっていて、その多様な評価に目をつけることで学力の面でやや劣る生徒も挽回できる、あるいは「偏差値輪切り」といわれる学力テストによるランク付けにとらわれない生徒の適性に合った進路選択ができるようになる、という前提が備わっている。藤田は1980年代後半以降の日本における(特に初等・中等教育に関する)教育改革を、内実の曖昧なキャッチ・フレーズに惑わされた、独善と思い込みに基づいて進められた改革として強く批判しているが<sup>4)</sup>、これらの推薦入試導入の前提とされる「根拠」もほとんどは推測に過ぎず、実際に実証されている事実ではない。そういった現状を鑑みれば、推薦入試の生徒へ及ぼす影響を考察した稀な実例として、本論文は大きな意義を持つと考えられよう。

本稿の構成は以下の通りである。まずこの10年で推薦入試が一気に拡大した例として埼玉県の実例をとり上げ、それが導入されるようになった背景や制度の運用状況を包括的に考察する。埼玉県をとり上げる理由については後に詳しく触れるが、ここではひとまず以下の3点を挙げておく。1つ目は埼玉県が首都圏にあるという地理的条件や埼玉県の高校の保持する特徴<sup>5)</sup>が、文部省の進める高校教育改革を積極的に進める要因となっており、また実際に高校の学科多様化や推薦入試といった改革も埼玉県で積極的に進められてきた経緯があるということである。2つ目は推薦入試を全校で導入したのが1994年であり、既に制度として定着していると考えられること、3つ目は1999年度の入学生に関して実に定員の36.3%が推薦入試を経ており、これは1999年度まで推薦入試を実施していた群馬県に次いで全国で2番目に大きな値で、生徒への影響も大きなものとなっていると考えられるという点である。

続いて同じく埼玉県の中学生を対象にした質問紙調査の分析により、推薦入試が下級学校(この場合は中学校)に及ぼす影響、特に先に述べた推薦入試の理念が実際に達成されているのか、また推薦入試の導入が多発する学校の問題を解決する特効薬となり得るのかを考察する。入試は生徒を獲得する上級学校側がどのような生徒をリクルートするかという視点のみで見られがちであるが、入試改革をめぐる論議ではむしろ入試制度が齎す下級学校への悪影響(過度の受験競争の齎す弊害など)が議論されることが多かった。現実の中卒者の大多数が進学する高校の入試は、多くの中学生の通る道であり、それが及ぼす影響も大きなものとなる<sup>6)</sup>。入試改革論議が下級学校への影響を考えてものであるのなら、その実態調査も行われなくてはならないはずである。こういった2点について分析、考察した上で、最後に結論と今後の課題を示したい。

## II 推薦入試拡大への道程

### A 埼玉県の置かれた状況

公立高校の入試制度は各都道府県ごとに異なっている。それは学区制の違いや総合選抜制の実施の有無などに還元されるものであるが、一方で原則として調査書と学力検査を同等に選抜材料として用いること、推薦入試では当日の学力検査を実施しないことという点で共通点が見られる<sup>7)</sup>。本稿では生徒に及ぼす影響そのものに関心があるため、具体的な事例によってその実態を解明するのだが、その事例を一般化するとき、どこまでがその県の特徴で、どこからが全国的な傾向と類似しているのかなどをしっかりと見極めておく必要がある。よってここでは推薦入試の導入に当初から積極的であった埼玉県を事例としてとり上げ、いかにして推薦入試かかしくも急激に拡大していったか、その背景について検討する。

表2 高校入学者の増加比率(79年比)の高かった県と低かった県

都道府県名	89/79	都道府県名	89/79
埼玉	1.68	秋田	0.95
千葉	1.59	鹿児島	0.98
神奈川	1.55	山形	1.03
滋賀	1.45	長崎	1.03
奈良	1.44	青森	1.05
全国	1.25		

15歳人口がピークに達する1989年と10年前の1979年の高校入学者数比は全国で1.25となっているが、その増加には地域により大きな差が見られる。表2にあるように、関東や関西の大都市圏の増加比が著しく大きい。一方でほとんど増加していない県は東北や九州といった地域に偏っている。この高校入学者数の急増に備え、1970年代から埼玉県など大都市圏では多くの普通科高校が増設された。それまでは普通科と職業科の格差拡大が問題視されていたが、多くの普通科高校が増設されると今度は普通科同士の間は無視し得ない格差が生じるようになってきた<sup>8)</sup>。埼玉県は進学面ではもともと公立優位であったが、東京までの距離が近いことや、新たに埼玉県に移り住んだ人達の「地元の公立名門校」志向はさほど強くはなかったことから、県南部を中心に東京への私立高校への生徒の流出が目立っていた<sup>9)</sup>。埼玉県内の私立高校の地位は相対的に「公立名門校」ほど高くはなかったが、1980年代後半の第二次ベビーブーム世代の参入に際し、少しでも優秀な生徒を早くから確保し、来るべき90年代の15歳人口急減に備えて高校の威信を高めておこうとする戦略に打って出た。これが業者テストを利用したいわゆる「事前相談」であり、ここで私立側は少しずつ基準偏差値を上げ入学する生徒の質も上昇させようとした<sup>10)</sup>。一方で増設された多くの県立普通科高校は底辺校として位置付けられ、15歳人口急減期にさしかかると生徒確保の点で県教委は強く私立高校を意識するようになる。一連の業者テスト騒動(1992年)は、もともとは教育現場に弊害を生む偏差値を追放するという「美談」ではなく、業者テストが私立高校の入試の事前相談に利

用され、生徒確保の点で私立とフェアな競争ができないと埼玉県教育長がクレームを発したのが発端であった。

業者テストが中学校から追放された翌年の1994年度の入試から、埼玉県では県下全公立高校での推薦入試導入に踏み切った。このタイミングは推薦入試が中学生の青田買いとして機能しているのではないかとの疑惑を持たれる原因となった。もともと職業学科や専門学科でしか実施されていなかった推薦入試が90年代に入って全国規模で広まったのは、15歳人口の急減が全国規模で一斉に起こっているから<sup>11)</sup>だと考えられる。埼玉県の場合、70年代に増設した高校が非常に多く、15歳人口の急減の影響をまろに受けること、さらに近隣の東京都や県内の私立高校との生徒獲得競争が非常に熾烈化しているという特徴が顕著に現れたため、推薦入試を導入しようとする動きに拍車がかかったのだと考えられよう。

## B 埼玉県の推薦入試の概要

公立高校における推薦入試には、大きく分けると以下の2つの形態がある。一つ目は予め中学校に推薦枠が分けられていて、中学校の校内選抜によって選ばれて推薦された生徒は自動的に合格が決まるというものであり、もう一つは中学校長の推薦状さえあれば誰でも出願できるというものである。埼玉県で行われている推薦入試は後者である。この場合、特に入試難易度の高い高校を志願する生徒は少ないチャンスを活かそうとする動きが強まるため、推薦入試は事実上の第一次選抜と化し、競争率が非常に高くなる。推薦入試の倍率と入試難易度(偏差値)<sup>12)</sup>の関係を散布図に表したのが図1である。推薦入

図1 推薦入試倍率と偏差値の関係

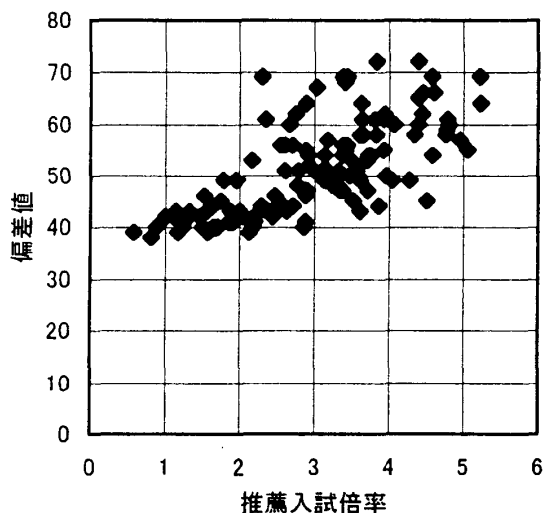
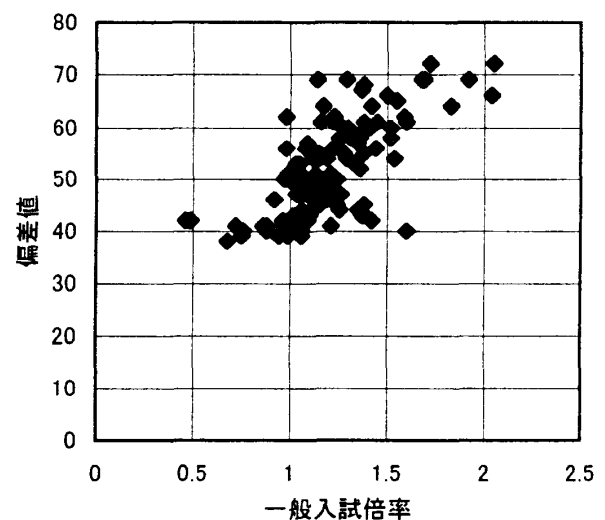


図2 一般入試倍率と偏差値の関係





ものである。これをみると、推薦要件はある程度現在の高校間格差を反映した内容となっていることが窺える。「生徒会・学級会指導者」「部活動の実績」といった項目はどのランクにも満遍なく分布しているが、「学習意欲が旺盛」「本校志望強い・適切」といった項目は本来教育困難校とされる下位校ほど重視すべき項目と考えられるにもかかわらず、上位校と比較するとこれらを挙げている高校は少なくなる。また「調査書の学習の記録」の項目を見るとわかるように、上位校では調査書でも学習の記録全般を重視していることが窺える。特定教科に優れる、というのは最上位校では1校も挙げていない。つまり最上位校では特定教科のみならず、全教科にわたって優れていなければ受け入れられない、すなわち全教科を満遍なくこなせることが要求されていることが示されているといえよう。また最上位校の2校では、部活の実績をアピールして入学しようとする学生に対し、「本校に適應できる知的能力が必要」というような条件を付け加えている。一方で下位校ほど、実績より普段の生活が問われていることがわかる。あとで検討するように、生徒会や学級活動におけるリーダー的な役割を担う人は、成績上位者が多い。したがって現実には生徒会役員経験者という条件だけを掲げたところで、下位校にそういった生徒が集まってくる可能性はかなり低くなる（公立高校の数は入試ランクが下がるほど増えているという状況にあるので、余計下位校にそのような生徒を入学させるのは困難となる）。「生徒会に努力していた」という項目は、そういった状況を見据えた上で挙げられたものだと考えられよう。つまり生徒会の役員はやらなくとも少なくとも協力した、努力したという実績（それがどんな点を見ることで評価できるのかという問題はあるが）がみられれば、それを推薦要件とすることができるということなのである。同様なのは部活に関してもいえることで、表3には載せなかったが、「部活に努力していた」「部活を3年間やっていた」という項目を設けている高校も「生徒会に努力していた」をあげた学校と同程度あり、普段の生活態度を重視しているという点で「生徒会に努力していた」という項目に通じるものがある。

このような点を考慮すると、推薦入試と一口に言っても、内実は非常に複雑な状況にあることがわかる。この推薦要件を見ただけでも、上位校に課される要求は非常に高い一方、下位校では今できる基本的な生活習慣などといったものを要求しているわけで、その要求のレベルの違いがかなり顕著である。なお先に述べたように、上位校の推薦入試の倍率は非常に高くなっているが、推薦入試で失敗した生徒が再び一般入試で同一校で再チャレ

ンジし合格している<sup>15)</sup>というのが実情で、従来からある一般入試のうち、調査書の内容が特に優れている生徒を敢えて明示化したのが推薦入試なのだともいうことができよう。当然推薦入試は一般入試に先駆けて実施されるから、推薦入試の理念などはともかくとして、ともかく優秀な生徒を早いうちに確保しておこうという手段として機能していることも考えられる。

埼玉県では1993年に、最上位校を除くほとんどの高校で推薦入試が導入されたあと、翌1994年に全校に推薦入試を拡大するというステップを踏んでいる。このときの状況について、現場の教員である青砥は以下のように述べている。

「今年（筆者注：1994年）の入試の特徴は、……『教育困難校』で定員割れが起きたことである。定員割れは県公立の全日制高校162校中、30校（700人）に上り、昨年（14校・305人）を大きく上回った。……県公立高校の内、大学進学者の多い高校では（前年まで）推薦入試が行われておらず、いわゆる『教育困難校』にとって生徒確保という点では、推薦入試はそれなりにメリットがあったからである。しかも、地元中学からは『学力』面で多様な生徒が、地元志向で少なからず『教育困難校』にも入学してきたのである。」<sup>16)</sup>

優秀な生徒の青田買いともいえる全校の推薦入試は、私立高校の生徒確保傾向も重なって（実際偏差値追放のあった1993年と1994年、続けて私立高校は定員を大きく超過している）、成績上位層の生徒の積極的な受験行動を促進し、その分県立の「教育困難校」への進学者が減少し、低学力の生徒が集まったのだという<sup>17)</sup>。つまり推薦入試を全面的に拡大したことで、学力以外に優れた側面を多く持つ生徒は選択肢も多く保持することができ、より有利な立場に置かれるようになる。しかし推薦入試で積極的に評価されるような業績を獲得できる生徒は非常に限られており、そのごく少数の上位層は激しい競争状態に置かれている一方で、そのような生徒を集めるのが困難な下位校での推薦要件は既にみたようにそれほど厳しいものではないにもかかわらず生徒が集まらないという状況にある。こうなると激しい競争状態にある上位層と、競争から取り残された大部分の層との格差が拡大していくということが考えられるだろう。これらについて、質問紙調査によって次章で詳細に検討したい。

### Ⅲ 質問紙調査のデータ分析

#### A 質問紙調査の概要

これまで検討してきた高校入試制度に対し、実際に受

表4 質問紙調査対象校

	男	女	開校	
A中学	101	107	1983	1学年6クラス, 市街と郊外の生徒混在
B中学	58	47	1947	1学年3クラス, 郊外
C中学	46	47	1947	1学年4クラスうち3クラスで実施, 市街
D中学	42	57	1983	1学年5クラスうち3クラスで実施, 郊外

数字は調査のサンプル数

験生(中学3年生)はいかなる意識をもって, どんな行動をとっているのだろうか。それを探るために埼玉県内の中学校で質問紙調査を実施した。サンプルは以下の表4のようになっており, 4つの中学校の男子247人, 女子258人の計505人である。

調査は各中学校の教師に委託する形で, 授業やホームルームを利用した集合自記式で実施された。実施時期は1999年6月, 7月, D中学校のみ9月となっている。全体では公立高校希望者が391人(77%), 私立高校希望者が22人(4%), 公立か私立かで迷っている人は35人(7%)という状況である。また一般入試希望か, 推薦入試希望かに関しては, 未回答が2割を占めたが, 一般入試希望が195人(39%, 回答者中では49%), 推薦入試希望者は144人(29%, 回答者中では36%)となっている。ただし推薦入試希望者の割合は中学校によってばらつきが大きく, C中学校では推薦入試希望者が47%にも上り, 一般入試希望の37%を大きく上回っている, という状況である。もちろん入試よりかなり早い段階で実施した調査であるので, このまま推移していったとは考えられないが, 中学校により推薦入試希望者の割合がこれほど異なるのは, 中学校による進学指導や情報提供などにかなり差が生じているためではないか, と推測できる。

前章最後で述べたように, 学校間格差構造が明確な公立高校で推薦入試が一面的に一斉導入されたとき, 推薦入試の中身は, 生徒の学業成績を無視して考えることはできない。生徒の成績についてだが, 質問紙で上位から下位の5段階評価で自己申告してもらった形をとった。そのうち上位とやや上位, 下位とやや下位を一緒にまとめて3段階に修正すると, 上位158名, 中位158名, 下位185名に分類できた。もちろん本来であるならば, この成績の自己認識と現実に差異があるのかなど, 詳細に検討すべきなのだろうが, この質問紙の結果, 上位から下位の分布が偏っておらず, 現行の調査書で利用されている相対評価を反映しているものとも考えることができるので, この自己申告がある程度信頼できるものとして取り

扱いたい。また別項で得意科目についても尋ねているが, この成績の自己評価と相関をもつ教科は数学・社会・理科・英語で, 生徒は受験の学力検査で利用される教科によって, 自分の「成績」を把握しているという状況が明らかになった。

#### B 推薦入試を希望する生徒とは

本論文の冒頭で述べたように, 推薦入試は学力試験で評価できない多様な個性や活動実績を評価することを目的として導入されている。しかし調査書の内容などから推薦入試で評価されるのは, ①部活動の実績, ②生徒会や学級委員の実績, ③文化芸術活動入賞実績, ④ボランティア活動の実績に分けられると考えられる。こういった実績を保持する生徒は, 推薦入試を利用しようとする傾向があるのだろうか。

ここではまず成績と希望する入試経路(推薦か一般か)と, 上に挙げた4つの業績のおのおの間で, 三重クロス表をつくったとき, それぞれの変数の間で相互作用があるかどうかを確かめてみたい。ここで利用するのは対数線型モデルであるが, 様々なモデルを想定し, そのモデルの適合度をみることで, どの変数との間に相互作用があるかを見極めることができる。モデルの選択については, より単純なモデルで, 尤度比カイ二乗値が小さいものを選ぶこととなる<sup>16)</sup>。

まず部活動の実績を持つ生徒についてクロス分析したのが表5である。表5の左をみるとわかるように, [BC]の相互作用項を含めると, 適合度が大幅に改善されることがわかる。この場合採択できる最も単純なモデルは[BC][A]であり, 相互作用項を2つ含む[BC][CA]との $L^2$ の差は2.257となっているが, 両者の自由度の差は2あるから, 有意にモデルが改善されたとは言えない。よってこの場合[BC][A]のモデルが採択される。ここから明らかになったのは, 部活動の実績そのものは推薦入試に活用されているということであり, それは学業成績とは独立した軸で評価されているということである。特に高校側にとって, 部活動での活躍, とり

表5 「成績(A)×推薦か一般か(B)×主将または県大会出場経験(C)」のモデル選択(左)とその三次元クロス(右)

	L <sup>2</sup>	d.f.	sig.
[A][B][C]	15.039	7	.0355
[AB][C]	14.839	5	.0111
[BC][A]	5.276	6	.5096
[CA][B]	12.783	5	.0255
[AB][BC]	5.071	4	.2801
[BC][CA]	3.019	4	.5547
[CA][AB]	12.587	3	.0056
[AB][BC][CA]	2.980	2	.2254

成績		Cあり	Cなし	計
上	推薦	20	27	47
	一般	13	47	60
中	推薦	16	35	51
	一般	18	49	67
下	推薦	16	30	46
	一般	9	57	66
合計		92	245	337

表6 「成績(A)×推薦か一般か(B)×学級委員・生徒会役員経験(C)」のモデル選択(左)とその三次元クロス(右)

	L <sup>2</sup>	d.f.	sig.
[A][B][C]	57.515	7	.0000
[AB][C]	57.314	5	.0000
[BC][A]	47.470	6	.0000
[CA][B]	11.731	5	.0387
[AB][BC]	47.269	4	.0000
[BC][CA]	1.686	4	.7933
[CA][AB]	11.531	3	.0092
[AB][BC][CA]	.933	2	.6273

成績		Cあり	Cなし	計
上	推薦	27	20	47
	一般	21	39	60
中	推薦	13	38	51
	一般	10	57	67
下	推薦	6	40	46
	一般	2	64	66
合計		79	258	337

わけ運動部での活躍はその学校の名前を売り出すことにつながり、学校側としても評価に値する実績となる。そして部活動に熱心な教師にとって、推薦入試は表沙汰にできなかった部活推薦という制度を正当化できる根拠となっている<sup>19)</sup>。実際のクロス表をみると、どの成績ランクでも、推薦入試希望者のうち部活動での実績がある生徒の比率は一般入試希望のそれより高くなっている。

続いて学級委員や生徒会役員といったリーダー的な役割を担っている生徒についてはどうなっているだろうか。これについては上記と同様の手続きを踏むと [BC][CA] が採択される。これも一般入試希望か推薦入試希望かで違いがあるといえるのだが、部活との違いは学級委員や生徒会役員といった役職が成績とも関連しているということである(表6の右のクロス表からもそれは明白である)。つまりこれらの役職についていると推薦入試を利用する傾向があるが、その役職は主として成績上位者ほど就きやすく、成績がよくないとこれらの役職に就きにくいということが出来る。したがって成績と

いう軸から完全に独立な評価がここで行われているわけではない。

続いて文化芸術活動について同様に検討してみる(表7)。L<sup>2</sup>の値から [CA][B] か [BC][CA] のどちらかのモデルを選択することになるが、両者のL<sup>2</sup>の差は2.064であり、自由度の差は1であるから、[CA][B] に比べて [BC][CA] が有意に適合度を高めているとは言えない。よってより単純なモデル [CA][B] が採択される。つまりモデル選択の上では、文化芸術活動の実績は希望する入試経路には影響を与えていないことになる。これらの実績は成績との関連が強く(クロス表を見ると、文化芸術方面での入賞はそもそも成績上位者にかたまっていることがみとれる)、生徒もこのような点での実績を売りにして推薦入試に臨もうとしている傾向に乏しいということが出来る。

最後に、最近選抜の材料としてしばしば言及されるボランティア活動については表8に示した通りである。これについてはこれまでとやや異なった結果が出ており、

表7 「成績(A)×推薦か一般か(B)×芸術活動入賞経験(C)」のモデル選択(左)とその三次元クロス(右)

	L <sup>2</sup>	d.f.	sig.
[A][B][C]	27.348	7	.0003
[AB][C]	27.076	5	.0000
[BC][A]	25.284	6	.0003
[CA][B]	4.472	5	.4837
[AB][BC]	25.012	4	.0000
[BC][CA]	2.408	4	.6612
[CA][AB]	4.472	3	.2407
[AB][BC][CA]	2.382	2	.3039

成績		Cあり	Cなし	計
上	推薦	26	21	47
	一般	29	30	59
中	推薦	22	29	51
	一般	29	38	67
下	推薦	14	31	45
	一般	10	55	65
合計		130	204	334

表8 「成績(A)×推薦か一般か(B)×ボランティア経験(C)」のモデル選択(左)とその三次元クロス(右)

	L <sup>2</sup>	d.f.	sig.
[A][B][C]	7.237	7	.4046
[AB][C]	7.073	5	.2153
[BC][A]	7.068	6	.3202
[CA][B]	2.450	5	.7840
[AB][BC]	6.843	4	.1444
[BC][CA]	2.220	4	.6954
[CA][AB]	2.286	3	.5153
[AB][BC][CA]	2.090	2	.3517

成績		Cあり	Cなし	計
上	推薦	20	27	47
	一般	30	30	60
中	推薦	20	31	51
	一般	24	41	65
下	推薦	18	28	46
	一般	18	47	65
合計		130	204	334

完全独立モデル(成績・推薦入試か一般入試か・ボランティア活動経験のそれぞれが全く独立しており、それぞれの相互作用、すなわち影響が全くない、という仮説)が成立してしまふ。[CA]の相互作用が入るとモデルの適合度が高まるが、その高まりの程度は有意なほどではない。ただし完全独立モデルでは社会科学的に「何も関係ない」という結論で終わってしまい、ほとんど意味を持たないので、[CA]を入れると若干適合度が上がるということに注目してみよう。つまり推薦入試などで評価の対象とされる項目としてしばしばボランティアが挙げられることがあるが、まずボランティア活動は生徒の推薦入試選択を促進する材料とは全くなっていない。[CA]は「成績とボランティア活動に関連がある」という相互作用項が含まれることを意味しており、クロス表に注目すると、実際成績上位者のほうが積極的に参加していることがわかる。成績と関係のなさそうなボランティア活動への関与度も、成績とは全く無関係ではなかったということである。

この対数線型モデルの結果からいえるのは、学業成績以外の点で完全に独立した軸で生徒自ら評価をしているのは部活動の実績しかない、ということができる。その他の項目はそもそも成績上位層に固まって配分されている。その中でも生徒会や学級委員などは経験している人数自体が少ないから、その成績上位層の中でも売りこむポイントとなりうると生徒は認識しているのであろう。しかし文化芸術活動やボランティアについては、自分の競争相手となる同等の成績の生徒と比較すると、ある程度それらの実績を同様に保持している人が多いように見受けられるからであろうか、これらを積極的に推薦入試に活かそうとする動きは、少なくともここでの分析からは読み取れないのである。

もう少し中身を詳しく検討するために、推薦入試希望者が1、一般入試希望者が0の従属変数、様々な実績を独立変数(実績がある場合は1、ない場合は0のダミー変数)で投入したロジスティック回帰分析を検討してみよう。その結果は表9である。成績に無関係に公立高校



表9 推薦入試希望者の特性（ロジスティック回帰）

	全 体		成績上位		成績中位		成績下位	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
県大会出場経験	.668*	1.951	.781	2.184	-.349	.705	2.002**	7.402
部活の主将	.710+	2.033	.588	1.801	1.606*	4.984	-.241	.786
学級委員経験	.494+	1.638	.362	1.436	.217	1.242	1.500	4.482
生徒会役員経験	1.796**	6.028	2.236**	9.359	1.725	5.610		
音楽の稽古ごと経験	-.254	.775	-.127	.880	-.089	.915	-.070	.932
スポーツクラブ経験	-.096	.908	-.828+	.437	.909*	2.482	-.316	.729
美術展入賞経験	.245	1.278	.564	1.758	-.123	.884	.752	2.121
硬筆・書道展入賞	.116	1.123	-.247	.781	.382	1.465	.321	1.378
作文入賞経験	-.153	.858	.265	1.303	-.540	.583	.788	2.198
定数	-.603**	.547	-.658+	.518	-.634	.530	-.814*	.443
N	336		106		118		110	
カイ二乗	26.470		18.430		14.659		19.859	
有意確率	.002		.030		.101		.011	

従属変数は1＝推薦入試希望，0＝一般入試希望

+は10%水準で有意，\*は5%水準で有意，\*\*は1%水準で有意

希望者の全員を分析にかけた場合、これまでの対数線型モデルの解釈を裏付ける結果が出ている。特に生徒会役員の規定力は大きく、一般入試より推薦入試を選択する確率が6倍以上であることがわかる。これを成績別にみると、どの成績層がそのような属性を持っているかが明らかとなる。まず生徒会役員は、本調査において成績下位で経験している生徒はいなかった。また成績中位層で回帰係数が大きいにもかかわらず有意差が出なかったのは、そもそも該当する人数が少なかったためと考えられる。生徒会役員経験者は全サンプル505人中27人と少なく、成績上位層もこの実績を活かすると判断した結果がこのような形で現れているのだろう。成績中位層については、ロジスティック回帰のモデル自体が有意なものとはいえない面があるが、このデータから判断すると運動での実績をより有効に活かそうとしている傾向が強いことがわかる。成績下位層では県大会出場、という実績が1%水準で有意となっている。なお県大会出場の実績はどの成績層にも同様に散らばっているが、主将や部長の経験者はやはり成績上位層が多いという風に分布が偏っている。成績上位層はこのロジスティック回帰で投入した独立変数の各要素を保持している傾向が強い。したがって成績上位層では単にこれらの実績を持っているだけでは推薦入試のセールスポイントにはならない。オッズ比からおおよその傾向は把握できるが、有意なのは経験者の少ない生徒会に限定される。成績中位層になると学級委員や生徒会役員経験者が減少する。主将経験者も

減少するが、その減り方は学級委員や生徒会役員ほどではなく、リーダーシップがあると評価される部活の主将の実績を有効に活用しようとしているのであろう。成績下位層では、主将の経験者そのものが減るので、県大会出場という実績をもって推薦入試に臨もうとする傾向が強まるのだと考えられる。文化芸術面での実績は成績下位層でオッズ比が大きくなっているものの、どの成績層においても有意差はない。

文部省や政策側が「個性重視」というときの「個性」が何を期待しているのかは明らかではないし、ここではそれを検討する余裕はない。ただしこれらの検討結果からいえることは、当の受験生は極めて偏った実績（部活や生徒会）のみに注目して推薦入試に取り組もうとしているということである。

### C 推薦入試を希望する理由

推薦入試導入の理念として注目されなくてはならないのは、学業にとらわれない個性を重視するという名目のみならず、推薦入試によって入学した生徒が学校の活性化に寄与することが期待されている、という側面である。当初職業科に導入された推薦入試であるが、その中には「推薦入学者がリーダーシップを発揮することによって、学校全体の学習意欲が高まること」<sup>20)</sup>という項目が含まれていた。学校間格差が明確に存在する場合、高校教育に問題点があるとすれば、その問題点は入学難易度の低い下位ランクの高校に起こることが多い、と考え

表10 推薦希望理由と成績の関係（ロジスティック回帰）

従属変数	成績上位		成績中位		成績下位	
	B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)
第一志望が固く決まっている	-.549	.578	.525	1.691	-.018	.982
早く合格が決められる	.491	1.634	.253	1.288	-.924*	.397
一般入試に自信がない	-.830+	.436	-.365	.694	1.132*	3.103
学力以外も評価してくれる	-.296	.744	.523	1.687	-.320	.726
親・教師のすすめ	-.951	.386	1.363+	3.908	-1.021	.360
難しそうでチャレンジ精神が沸く	.212	1.236	-.755	.470	.575	1.776
筆記テストが苦手	-1.014*	.363	-.181	.834	1.228**	3.414
定数	.004	1.004	-1.085*	.338	-1.125*	.325
N	139		139		139	
カイ二乗	14.800		10.289		25.503	
有意確率	.039		.173		.001	

従属変数は1=各成績に当てはまる, 0=当てはまらない

+は10%水準で有意, \*は5%水準で有意, \*\*は1%水準で有意

られる。推薦入試はそれらの解決に有効なのだろうか。

推薦入試を選択する理由を当てはまるものすべて○をつける複数回答方式で回答してもらった。その項目を独立変数とし、当てはまる場合を1, ○が付いていなければ0, というダミー変数でおいた。従属変数はそれぞれの段階の成績に当てはまる場合を1, そうでない場合を0とした。こうすることで各成績層で重視されている理由を判定することが可能となる。表10がその結果である。

特に成績中位層でのモデルは有意とは言えない面があるが、親や教師にすすめられてという主体性の欠如した理由で推薦入試を選ぶ人が成績中位層でそうでない成績層の約4倍と多くなっていることがわかる。一方成績上位層であるが、「一般入試に自信がない」「筆記テストが苦手」という理由をあげた人はそうでない成績層の半分以下であり、全く逆の結果が出ているのが成績下位層で、他の成績層の3倍以上の率で「一般入試に自信がない」「筆記テストが苦手」という理由を挙げるようになっている。成績上位層では推薦入試はある程度の学業成績をとっていることを前提として、それにプラスアルファの実績が求められているので、学力一発型の試験より負担が大きくなるのが考えられる。その一方で推薦入試の「学校の活性化」機能に注目するならば、本来ならその高校への志望が強い生徒を受け入れるべきなのだろうが、様々な問題を抱えていると考えられる下位層の「第一志望が固く決まっている」をみると、オッズ比は1に近く、そのような理由で推薦入試を選んでいる生徒の分布が成績下位層に多いといった傾向は読み取れない

ことがわかる。成績下位層にとって、推薦入試は学力試験のない「楽な」選抜という手段に過ぎない。このような状況を見ると、推薦入試が学校の活性化機能を果たしているかどうかは、特に下位ランクに位置付けられる高校にとっては疑問符を打たざるを得ない状況であるといえよう。

#### IV まとめと今後の課題

いわゆる学力試験に偏った選抜方法は評価の軸が一つであるから、すべて偏差値という一元的な見方に支配され、確固たる学校間格差ができあがり、下位ランクに位置付けられた学校に歪みが生じるのだ。これが入試改革を進めるにあたっての前提となる現状認識である。その強固な学校間格差や偏差値という一元的な物差しでの評価を解消するために、多元的な評価を持ち込む、という流れは一見合理的に見える。しかし本調査での結果は必ずしも意図通りの成果を導くものとはなっていないようである。

表11, 12からわかるように、一見学力と無関係にみえる要素も、成績上位の人のほうがより多くのものを保持しているといえよう。まさにマートンがマタイ効果と名付けた現象のごとく、成績上位者に多くの役職や賞がめぐってくるのである。岩田によれば、欧米での評価は表に出た結果そのものを重視するため評価が特定分野に結び付けられやすいが、日本の場合当人のもつ潜在能力を重視するため、結果が出ないことが本人の努力の欠如のせいとされ、それゆえ評価が人物評価そのものにまで拡

表11 獲得した賞の数と成績との関係 (数字は人数)

賞数	成績上位	成績中位	成績下位	合計
0	51	84	117	252
1	51	37	48	136
2	28	25	15	68
3	23	11	3	37
4	3	1	0	4
合計	156	158	183	497

部活県大出場, 美術展, 書道・硬筆, 作文について

表12 経験した役員の数と成績との関係 (数字は人数)

役員数	成績上位	成績中位	成績下位	合計
0	59	88	115	262
1	58	48	52	158
2	32	19	18	69
3	8	2	0	10
4	1	1	0	2
合計	158	158	185	501

生徒会役員, 学級委員, 部主将, 専門委員委員長について

大してしまうのだという<sup>21)</sup>。表11, 12のような結果はそのような点から説明可能である。推薦入試という形態は、そのような評価観を露骨に明示化したものということができる。少なくとも学力中心の選抜であれば、(上記のような傾向があるにせよ)失敗しても「勉強だけがすべてではない」と言って済ますことが可能であったが、推薦入試のような入試ではその人物そのものを評価することにつながるわけだから、失敗した場合「人物」が劣るのだという解釈がなされ兼ねない危険性をもつ。

あるいは「個性」と言って多元的な評価を提示したとき、その評価の軸が完全に独立であれば実際に多様な人物が集まるだろうが、評価軸を増やすことで却って類似した人物が集まることもあることも考慮する必要があるだろう<sup>22)</sup>。特に選抜の材料として利用されるとき、その評価には一方向の価値観が持ち込まれ、個性といいながら「目立つ」「リーダー的」な人物のみが高く評価されるような性質を帯びてしまうことにもなり兼ねない。また学力以外の選抜要素も学力上位層に偏っているとすると、個性あるどころか、多くの軸で類似した生徒が集まるということになってしまうのである。

注意を要するのは、推薦入試の正当化の理由として、推薦入試で入った生徒のほうが向学校的で、勉学にやる

気があり、リーダーシップがとれるから、という点が挙げられることである。推薦入試がもともとそういう生徒を集めるために意図されたのであればそれは当然の結果であるが、そういった生徒が一般入試では集めることができなかったのか、という問題は別に残る。従来的一般入試でも入れた生徒のうち、推薦入試というコースで入った生徒に向学校的な人が多く含まれていたから、効果があったように見えるだけかもしれない。つまり上記に挙げた理由だけでは、推薦入試の導入で向学校的な生徒が以前より多く入ってきた、ということを示していることにはならないのである(ただし向学校的な生徒が増え、一見表向きの学校問題がなくなったように「見える」ことが問題の解決と見なせるのか、という問題は別に検討されなくてはならないだろう)。

多くの有力な資源を保持する成績上位層はより大胆な受験行動をとることができるようになる。一方、高校間格差構造を前提とすれば、このような形での推薦入試の導入が、多くの問題を抱える下位ランクの高校の問題解決に寄与すると考えるのは困難である。もちろん今回の質問紙は中学生を対象にしたものであり、実際にこのデータ通りの生徒が選抜されているということではないという限界を持つ。しかし受験の前で既に多くの中学生は一般入試か推薦入試かという選択肢を自ずと決めており、その戦略に添った行動を起こしているのである。さらに今後は複数の高校を対象に同様の調査を行い、どのような生徒が入学しているのか、裏付けをとるといった課題が残されている。

(指導教官 藤田英典教授)

## 註

- 『第15期中央教育審議会第二次答申 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』(1997)
- 群馬県では1999年度まで推薦入試が実施されていたが、2000年度から中学校長の推薦が不要となり、調査書を選抜の主たる材料として用いる「前期選抜」が実施されるようになった。しかし中学校長の推薦状の有無以外に、両者に実質的な差はない。大阪府には学力検査を課さない推薦入試の(あるいはそれに準ずる)ような入試形態は存在しない。
- 全入学者の18%が推薦入学者。学科別に見ると、普通科は11.6%、職業・専門学科は32.6%、総合学科は32.2%が推薦入学者である。割合は県によりかなりばらつきがあるが、昨年まで推薦入試を実施していた群馬県では全定員の実に4割以上が推薦入学者であったが、推薦入試に代わって実施された前期選抜の定員枠は、一部の進学校が20~30%となっているほかはほとんど40~50%となっており、実態はほとんど変

- わっていないと推測される。
- 4) 藤田英典,『市民社会と教育』世織書房, 2000, p.181
  - 5) このあたりについては小川洋,『なぜ公立高校はダメになったのか』亜紀書房, 2000, に詳しい。
  - 6) 藤田, 上掲書, p.314以降に詳しい。
  - 7) これはあくまで原則であり, 最近の改革により教科ごとの傾斜配点や学力検査と調査書の配点比率を学校ごとに決めることが可能になるなどの制度の弾力化が認められるようになったため, 入試制度はより複雑化しているということもできる。
  - 8) 文部省の打ち出した「新しいタイプの高等学校」づくりが, 千葉(幕張東・北・西の集合型選択制高校), 神奈川(弥栄東・西高校), 埼玉(伊奈学園総合高校)といった首都圏で行われたという事実は単なる偶然ではなく, これらの県で多くの普通科高校が増設された結果様々な矛盾が噴出したため, その打開策として積極的に導入されたのだと解釈できる。なお, 全国に先駆けて普通科高校で推薦入試が導入されたのは, 埼玉県立伊奈学園総合高校で, 1983年のことであった。
  - 9) 埼玉県立高校の「名門校」の現役合格率は3割から4割と非常に低く, 1988年頃から県議会でも問題として取り上げられるようになっていた。このような状況も公立離れの一因となっていると推察される。
  - 10) AERA 5 (50), 1992年12月8日号, p.6-9
  - 11) 1998年の高校入学者数は89年比で0.74にまで落ちこむ。0.9台にとどまっているのは宮城の0.94のみであり, 他は軒並み0.8~0.7で, 東京・神奈川・愛知・大阪は0.7を割りこむ。
  - 12) 晶文社出版『高校受験案内』2000年度用による。
  - 13) 埼玉県教育委員会,『昭和63年2月定例県議会概要』, 1988, p.27-28
  - 14) 埼玉県教育委員会,『平成2年9月定例県議会概要』, 1990, p.4-5
  - 15) AERA 8 (3), 1995年1月8日号の「名門高校にも推薦入学の波」という記事によれば, 埼玉県内最上位校とされているある県立高校において, 1994年度の推薦入試で不合格だった205人中, 170人以上が一般受験で再受験して合格したという。
  - 16) 青砥恭, 1994, 「いっそう学校間格差を拡大した『脱偏差値元年』の埼玉高校入試」, 『季刊教育法』No.98, pp.21-26
  - 17) 上掲論文による。埼玉県の学力検定試験は, 1教科40点満点5科目の計200点満点である。全日制県立高校の入試の平均は1993年度が118.0点, 1994年度が109.2点と下がっている。「教育困難校」の中には, その合計の平均点が50点に満たない高校が3校あったという。ただし平均点の低下については, 入試問題が難化したとか, 全体の生徒の学力が低下したことも可能性として考えられるが, 全校で推薦入試を実施したため, 学力の高い層が推薦入試で合格して一般入試で受験しなかったから, という原因も考えられる。なお一連の受験生の受験行動については, 小川洋, 1997, 「高校入試改革の動向と帰結」, 菊地栄治編『高校教育改革の総合的研究』, 多賀出版, pp.131-157にも詳しい。
  - 18) Everitt, B.S., 山内光哉監訳『質的データの解析—カイ二乗検定とその展開』, 新曜社, 訳書1980, pp.103-104, Christensen, R. “Log-Linear Models” Springer-Verlag, 1990, pp.89-90参照。より複雑なモデルを採択するためには, 元のモデルとの尤度比カイ二乗値 ( $L^2$ ) との差をとり, 両モデルの自由度の差のカイ二乗値を比較して, その差のほうが大きな値をとった場合に, モデルが改善されたとして採用するというものである。本論でのモデルの採択は原則としてこの方法で行っている。
  - 19) 藤田敏明『単位制は教育改革の切り札か?』洋泉社, 1997, pp.203-205
  - 20) 時事通信社『内外教育』2774号, 1976.7.27.の記事による。
  - 21) 岩田龍子『学歴主義の発展構造』日本評論社, 1981, pp.125-127。ここでいう能力重視とは, 能力は誰にでもある, だから努力すれば成功できるのだという見方をさす。例えば普段自分は勉強していないのだ, という素振りを見せるという点にそれは典型的に現れる。そうすることで潜在能力の高さを誇示しているのだという。
  - 22) 一例としてアメリカの大学入試改革の例を挙げる。20世紀初頭, コロンビア大学やハーバード大学などでは, 急増するユダヤ人学生の入学を「差別しない」で制限するために, WASP的な価値観に基づく選抜基準をもち込んでユダヤ人学生の数を「合法的に」減らしたことがあった。これについては Steinberg, S. “The Academic Melting Pot : Catholics and Jews in American Higher Education” McGraw-Hill, 1974, や Karabel, J. 1984 Status-Group Struggle, Organizational Interests, and The Limits of Institutional Autonomy : The Transformation of Harvard, Yale, and Princeton, 1918-1940, Theory and Society, 13, pp.1-40 参照。